書　評・紹　介

László J. Kulcsár and Katherine J. Curtis, Editors
International Handbook of Rural Demography

Springer, 2012, xiii+405pp.

本書のタイトルをみて，「なぜ，今さら rural 人口なのか？」と疑問に思われる読者も多いのではないか．2011年の国連推計によると，世界の都市化率は52.1％とついに半分を超えた．更に2050年には，67.2％に達すると予測されている．定義が変わらない限り，都市化率が低下することは考えられない．ならば，rural 人口について研究する意義はどこにあり，そして rural 地域の人口動向にはどのような特徴や問題がみられるのか．

本書は45人もの専門家を集めて編集された力作である．著者の多くは，米国 Rural Sociological Society（RSS）の主要メンバーであるため，社会学的色彩の濃いものとなっている．米国の rural demography に関する書籍は，米国内の rural に焦点を絞りがちであり，他国における rural 人口の動向は取り上げない傾向がある．一方，米国の一般的な人口学に関する書籍は，過疎化を除けば rural 地域における人口変動についてはあまり取り上げない．そういう意味では米国国内に限定されることなく，広く国際的な視点から編集された米国において初めての rural demography に関する書籍と言えるだろう．

本書は26章から成っている．第 1 章の rural demography の意義や rural の定義に関する序章に続き，第 2 章～ 6 章は米国にみられる rural 人口の新しい動向，先進国における rural 地域に共通してみられる過疎化・高齢化の問題と人口移動の関係，そして世界の都市化の問題が取り上げられている．ジョンソンとリヒターによる第 3 章では，2000年以降にみられる米国の rural 人口増加の要因について興味深い分析を行っている．1990年代の rural 人口の増加は，ヒスパニック系移民の国内人口移動によるものが主であった．しかし，2000年に入ってからは rural 地域の自然増加によるものが主となっており，これは90年代に rural 地域に流入したヒスパニック系移民による自然増加という要因が大きい．

第 7 章～14章は，諸外国の rural 人口の動向についてであり，ヨーロッパ，ラテンアメリカ，アジア，サハラ以南のアフリカ，中国，メキシコ，インド，カナダのケースが並べられている．チャンピオンによる第 7 章では，ヨーロッパの rural 人口の動向を扱っている．西ヨーロッパでは1970年代に rural 地域への U ターン移動（自分の出生地域とは限らない）が退職者のみならず30-40代の働き盛りの世代にも普及したこと，近年では主として退職者による一国の都市から他国の rural 地域への国際移動がみられること，医療や年金に関する社会保障協定の存在が，このような移動を促進していることが示されている．米国のケースと並び，近年のヨーロッパにおける rural 地域の人口変動要因は，国際移動の影響が絡む形に変化しつつある点が興味深い．

第15章～18章は米国に焦点を戻し貧困，人種・エスニシティ，ジェンダー，家族，健康といった社会的側面と rural 地域の関連性について，第19章～22章は貧困，労働市場といった経済的側面と rural 地域の関連性について，そして第23章～24章は，環境，資源からのアプローチである．最終章では概念の問題に再び立ち戻り，最新の定義の試み（多角的なアプローチ，認識論など）について地理学の立場から近年の議論を集約している．

米国において rural を研究対象とする研究者には，rural の定義という問題が常につきまとう．というのも rural は urban を人口規模や密度といった指標で定義した後の残りの空間として一括りにされてきたからである．定義の問題は度々浮上し，新しい提案がなされているのもこの分野の特徴であろう．評者が“rural”という英語を目にする度に何と訳せばよいのか戸惑うのも，rural という概念が非常に多様性に富んでいるためである．本書を米国の rural demography の最新の成果を広く知りたい人にお勧めする．　（千年よしみ）